

清沢満之「真宗大学開校の辞」 翻訳と解説について

国際仏教研究

国際仏教研究班では、受信と発信をその活動の柱においている。受信とは海外の仏教研究の動向を把握することであり、今までにも国際学会などに参加してきた。一方、発信の具体的な方法としては、清沢満之などの、いわゆる近代教学を英訳し、それを海外へと紹介してきたことがあげられる。

今回、国際仏教研究班では、清沢満之が1901（明治34）年10月13日に行った真宗大学移転開校式における「真宗大学開校の辞」（以下「開校の辞」）を翻訳した。研究補助員のマイケル・コンウェイが下訳をつけ、それを国際研の研究員で検討した。よって、「開校の辞」の英訳は国際研名義とした。

なお「開校の辞」が述べられた当日の状況や、真宗大学をめぐる歴史などを「解説」として付した。こちらは研究員の田村晃徳の文を、マイケル・コンウェイが英訳した。「開校の辞」理解の一助となれば幸いである。

国際仏教研究研究員 田村晃徳

清沢満之「真宗大学開校の辞」

本日は当真宗大学新築移転の式を挙ぐるに際し広く朝野の諸氏の御高来を恭
ふし茲に盛大なる式典を行ふを得たるは洵に私共の光榮と存じます、

就ては本学は今日こゝに始めて開設したのではなく元京都にありましたのを
此処に移して校舎のみ新に建築したものであります、その概略は真宗大学要覧
に就て御覧下された通りであります、唯其大体に就て申し上げますことは本学
は他の学校とは異りまして宗教学校なること殊に仏教の中に於て浄土真宗の学
場であります 即ち我々が信奉する本願他力の宗義に基きまして我々に於て最
大事件なる自己の信念の確立の上に其信仰を他に伝へる即ち自信教人信の誠を
尽すべき人物を養成するのが本学の特質であります、而して本学は予科二年本
科三年と分れて都合五箇年の修業で一先づ卒業するのであります、更に進で攻
究すべき人物を特に選抜して研究院に入れ三年乃至五年を以て其業を卒はるの
であります、又其科目に至りては一派に於ける宗学と及び他の諸宗の教義の学
と最も本学に直接の関係を有する所の須要なる世間の学科とを教授いたします、
勿論今日の有様では完全ではありませぬけれども冀くば仏祖の冥祐の下に外は
広く内外諸士の賛助を得、内は教職員生徒一同に力を協せ本学の目的を達した
きことであります、

KIYOZAWA Manshi “Address for the Opening of Shinshū University”

Today, as we hold the ceremony to commemorate the construction and relocation of our Shinshū University, it is truly a great honor for us to be able to have such a grand celebration here, thanks to the attendance of many distinguished officials and guests.

This university is not established here, today, for the first time. Rather the one that was originally in Kyoto was moved here. It is just that the school buildings have been newly built. Its outline can be seen in “The Guide to Shinshū University.” Generally speaking, our university differs from other schools in that it is a religious school. More specifically, it is an academy for the study of True Pure Land Buddhism (Jōdo Shinshū), within the Buddhist tradition. In other words, taking the fundamental teaching of the Other Power of the Original Vow, which we serve and trust, as our basis, we seek what is for us the matter of greatest importance: to establish one’s own religious conviction and then relay that faith to others. That is, the special character of our university is to cultivate individuals who will strive to achieve the true spirit of “having faith oneself and teaching others to have faith.” As such, our university is divided into a two-year preparatory course and a three-year regular course. Initially, a total of five years of training are required for graduation. Further, those individuals who deserve additional education will be specially selected to advance to the research course for three to five years to complete their training. Also, as for the course work, we will teach doctrinal studies for our branch of Buddhism, and also the doctrines of the various other Buddhist schools, along with those essential, non-religious subjects that are directly related to the work of our university. Although the present form is far from complete, I hope that, with the blessings of the Buddha and the patriarchs, externally with the assistance and support of various gentlemen both within and outside of the sect, and internally with the combined efforts of the professors, staff and students, we can realize the goals of our university.

「開校の辞」について

田村 晃 徳

清沢満之(1863-1903)の人物像をどのように語るのか、については様々な視点が存在する。最新の『清沢満之全集』(岩波書店)の項目を見ればわかるように、哲学者、宗教者、宗門の改革者など、多くの側面から彼の業績は知ることが出来るのである。だが、そのような多方面への活躍において、教育者としての一面が看過されてならないことは、言うまでもない。

大谷大学は2003年に開学百周年を迎えた。これは、清沢が初代学長として任についた「真宗大学」が1903年に開設されたことに由来する。真宗大学は1903年10月13日に開学記念式典を行い、その歴史を始めた。だが、真宗大学の「開校の辞」において述べているように、京都にあったものを、東京に移転させたのである。ここで、「開校の辞」の理解のために、必要な事項について簡単に説明をしていきたい。そこでは、①真宗大学東京移転までの歴史 ②開校記念式典当日の様子 ③真宗大学東京設置への思い、が中心となるだろう。

①真宗大学東京移転までの歴史

真宗大学の歴史は江戸初期である1665年に涉成園内に真宗大谷派の教学を研究講義する学校である「学寮」を設置したことから始まる。そして1755年に高倉通魚棚に移動したことをもって、高倉学寮となったのである。1868年には護法場ができた。護法場とは、キリスト教を始めとした、西洋の文化を研究する場所である。鎖国が解除される以前から、西洋の文化を学ぶ施設と聞けば、先進的な感じがする。だが、護法場という名前から分かるとおり、西洋の学問を研究することのみが、本来の目的ではなく、伝統的な宗義を護るために設けられたのである。つまり護法場における西洋文化研究は外部からの批判の対応と、宗門の正当性の主張にその目的があったのだ。しかし、そのようなねらいとは反対に、外学を学んだことは、宗門の外に目を開かせる契機ともなり、教学における新たな対立を生み出すこととなるのである。伝統に固執する者たちと、刷新を図ろうとする者たちとの対立の構図は、後の真宗大学の東京移転にいたる歴史的経緯に深い影響を及ぼしているように思われる。

1873年には高倉学寮と護法場を貫練場と改称した。ここでは真宗を学ぶ「宗乗」、華嚴、天台など真宗以外の仏教を学ぶ「余乗」が設置された。それ以外にも Sanskrit 語や、地理、史学などが教授されていた。貫練場は後に貫練教校と改称され、さらに1882年には真宗大学寮とされた（これは大「学寮」であり、いわゆる大学をさしているものではない）。

1896年に「真宗高倉大学寮条例」と「真宗大学条例」が制定された。大学寮にあった、本科第一部（宗乗、余乗など）、第二部（宗乗、余乗、外国語による哲学、近世科学など）、研究科（本科卒業生による、大学院修士課程のようなもの）を「真宗大学」とし、宗乗専修院（将来の講師職養成のための大学院博士後期課程にあたる）、安居の二つを「真宗高倉大学寮」として、別の組織にした。ここに大谷派の歴史で初めて、「大学」を名乗る研究教育機関が誕生したのである。清沢の開校の辞にある、「本学は……元京都にありましたのを」というのが、この真宗大学である。実はそれまでの真宗大学は、講師陣やカリキュラムなどからうかがえる種々の矛盾や問題点を抱えていた。清沢をはじめとした、教学の刷新を願う人々にとっては、到底満足できるものではなかったのだ。

そのような真宗大学ではあったが、前述の通り1901年に東京に移転される。そこに至るまでには、様々な事件があったのだが、ここに詳細を述べることは省略する。だが、東京移転を実現させたのは、清沢ら教学の刷新を願う人々の思いが形をとったものであったことは強調されなければならない。そこには、僧侶や教学などのあまりにも墮落した仏教界の現状にたいする清沢たちの批判が中心に存していたのである。

だが、東京移転の10年後には再び京都に戻る事となった。京都の高倉大学寮と東京の真宗大学を合併して「真宗大谷大学」と改め、京都に置くことが東本願寺により決定されたからである。

②真宗大学開学記念式典

開学式典は1901年に東京の巣鴨で挙行された。当日の式の様子については東京朝日新聞や『無尽灯』に詳しく記されている。式次第は次の通りであった。

真宗大学東京移転開校式次第

一、仏壇開扉

- 一、一同起立、礼拝
- 一、君が代斉唱
- 一、教育勅語奉読南条博士
- 一、開校の辞清沢学監
- 一、新法主の告辞
- 一、来賓祝辞・演説菊池文相（代理・岡田総務長官）・近衛公爵・千家知事・井上文科大学長・島地黙雷、長谷教学部長
- 一、学監謝辞

当日の式には、東本願寺法嗣大谷光演と夫人章子、近衛篤麿（あつまる）公爵、久我建通（こが・たけみち）公爵、菊地大麓（だいろく）文相、岡田良平総務長官などの政府要人、帝国大学総長山川健次郎、文科大学長井上哲次郎、島地黙雷、その他高等専門学校長、各宗派高僧などの来賓が招かれ送迎の馬車や人力車は300余に達した。

③真宗大学東京設置への思い

清沢は何故真宗大学を京都から東京に移転することを望んだのか。この問いに答えるためには、清沢が当時抱いていた危機感を確認しなければならない。

大学の移転については、清沢ら教学の刷新を求める人々は、早くから東京移転を主張していた。清沢は『教界時言』第9号「真宗大学新築の位置について」では真宗大学の教室などが狭くなってきたこと、市街の雑踏の中にあるため、授業に不便な面があることなどをあげ、新築案が議制局に上がろうとしていることは、慶ぶべきことだとしている。その上で新築の位置については「永遠の計として東京京都の両地と定め、而してその新築は東京を先とする」と述べている。つまり、東京と京都の両方に大学を設置する構想なのであった。

しかし、そのような教室の狭さ等といった、施設面の改善が東京移転の主たる理由ではないことは言うまでもない。先の「真宗大学新築の位置について」の大部を費やして述べられているのは、墮落した仏教界、特に大谷派の状況と、東京という場所の持つ積極性であった。

先の論文によると、清沢は大谷派の革新を期していたが、その「革新の要」とは「精神的革新」であり「宗教的精神」を盛んとすることであった。しかし、

その願いの一方で当時は「僧侶の腐敗」が極まっている有様であった。これは「僧侶教育の怠慢」に原因がある。よって、何よりも必要なのは「精神的教育」なのであった。

では何故東京なのか。東京とは「吾邦文化の中心にして社会の大勢の最も早く現はるゝ地」である。しかし、仏教界はどうであるか。社会が変化して、進歩していく中、キリスト教が東京に本拠地を置き勢力を伸ばしている。一方、仏教は何も変わらない。清沢は、仏教界が旧態依然として「京都の小天地」にとどまっていることが、その勢力を失わせる一因であるとしている。故に、東京とは真宗大学を設置するには「宗教的精神に富み進歩的思想の盛んなる活発有為の宗教家を養成するに最も適当な地」なのであった。ここに真宗大学の東京設置への清沢の期待を端的に見ることが出来る。

Introduction to KIYOZAWA Manshi's
 “Address for the Opening of Shinshū University”

TAMURA Akinori

Translated by Michael CONWAY

There are various viewpoints regarding how to understand the character of KIYOZAWA Manshi 清沢満之 (1863–1903). As one can clearly grasp from glancing at the contents of the latest *The Collected Works of KIYOZAWA Manshi* (Iwanami Shoten), there are various aspects from which one can see his achievements, as philosopher, man of religion and reformer of Shinshū Ōtani-ha, among others. However, needless to say, along with his activities in these many fields, one must not overlook his work as an educator.

In 2001, Otani University celebrated the hundredth anniversary of its founding, which is based upon the fact that Shinshū University, with Kiyozawa as its first president, was opened in 1901. This history began when, on October 13, 1901, Shinshū University held The Ceremony to Commemorate the Opening of the University. However, as is stated in Kiyozawa's “Address for the Opening of Shinshū University,” the university that was in Kyoto was moved to Tokyo. In this short piece, to assist in the understanding of this address, I will explain in simple terms a few necessary items, especially 1) the history of the university prior to the move to Tokyo, 2) the conditions on the day of the opening ceremony and 3) Kiyozawa's hopes regarding the establishment of the university in Tokyo.

1) *The History of Shinshū University prior to the Move to Tokyo*

The history of Shinshū University begins in 1665, in the first part of the Edo period, with the establishment of an academy (*gakuryō* 学寮) for the research and explication of the doctrinal studies of Shinshū Ōtani-ha within the Shūsei Gardens in Kyoto. Then, when the academy was moved to the corner of Takakura and Uodana Streets, it became The Takakura Acad-

emy. In 1868, the Institute for the Protection of the Dharma (Gohōjō 護法場) was formed. It was a place for the study of Western culture, particularly Christianity. Although an institute for the study of Western culture this early in Japan's history may appear to be quite progressive, as its name indicates, the primary purpose of the Institute of the Protection of the Dharma was the protection of the traditional religious teachings of the sect from the encroachment of Western ideas. In other words, the research on Western culture at the institute was aimed at the creation of responses to criticisms from the outside and at the justification of the religious organization and doctrines. However, opposite to this original aim, the study of subjects other than doctrinal studies became a catalyst, opening eyes to things outside of the confines of the sectarian organization and creating new conflicts in the realm of doctrinal studies. The composition of the opposition between those who were strongly attached to tradition and those who moved towards innovation deeply affected the historical course of the move of Shinshū University to Tokyo.

In 1873, the Takakura Academy and the Institution for the Protection of the Dharma were renamed as the Kanrenjō 貫練場. Here, "Sectarian Studies," for the study of True Pure Land Buddhism (Jōdo Shinshū) and "Other Buddhist Studies," for the study of the doctrines of Tendai, Kegon and other Buddhist schools, were established. Sanskrit, history and geography were also taught. The Kanrenjō was later renamed the Kanrenkyōkō 貫練教校 and, in 1882, was again renamed as the Great Academy of Shinshū (Shinshū Daigakuryō 真宗大学寮). (Although this name contains the characters that today mean "university," at the time it meant a "great academy," not what we consider today as a university.)

In 1896, the Ordinances of the Shinshū Takakura Academy and the Ordinances of Shinshū University were enacted. Two new organizations were created in which the first and second parts of the regular course (doctrinal studies, other Buddhist studies, philosophy in foreign languages, modern sciences, and other courses), and the research course (equivalent to

the present day Master's program, and consisting of graduates of the regular course) of the Great Academy of Shinshū were combined to form Shinshū University, while the Institute for the Singular Pursuit of the Sectarian Studies (Shūjōsenshūin 宗乗専修院), which was for the training of future lecturers at the university, and was the equivalent for the present day Doctoral program, along with the retreat program (*ango* 安居), were taken as the Shinshū Takakura Academy. Here, for the first time in the history of the Ōtani-ha, was born a facility for research and education that took the name “university.” The statement, “this school ... was originally in Kyoto,” in Kiyozawa's address refers to this Shinshū University. In reality, Shinshū University, prior to Kiyozawa, had a variety of contradictions within the curriculum and problems among the professors. It was in a quite unsatisfactory situation for the innovators of doctrinal studies, especially Kiyozawa, himself.

The university was plagued with a variety of problems, but, as stated before, it was moved to Tokyo in 1901. There were various incidents leading up to this move, but I will omit these details for the sake of clarity. However, I must emphasize that the completion of the move to Tokyo was the realization of the hopes of Kiyozawa and his fellows, who were working for the innovation of doctrinal studies, which was centered on their strict criticism of the situation of Buddhism at the time, where both the ministry and doctrinal studies were filled with corruption.

However, after just ten years in Tokyo, the university was returned to Kyoto. Based upon the decision of Shinshū Ōtani-ha officials, Shinshū University of Tokyo and the Takakura Academy of Kyoto were merged, renamed as Shinshū Ōtani University and relocated in Kyoto.

2) *The Ceremony to Commemorate the Opening of Shinshū University*

The ceremony for the opening of the school was held in 1901 in the Sugamo district of Tokyo at the new campus. There are detailed accounts of the situation at the ceremony in both the *Tokyo Asahi Shinbun* and the

Mujintō 無尽灯 (Inexhaustible Lamp). The program for the ceremony was as follows:

Opening of the Doors of the Buddhist Altar.

Simultaneously Stand and Bow.

Singing of the National Anthem.

Reading of the Imperial Rescript on Education (Dr. Nanjō).

Address on the Opening of Shinshū University (President Kiyozawa).

Statement by the New Abbot.

Commemorative Addresses by Special Guests: Minister of Education Kikuchi (Secretary-General Okada, proxy), Duke Konoe, Governor Senke, Inoue, President of Bunka University, Shimaji Mokurai, and Hase, Director of Doctrinal Studies for Shinshū Ōtani-ha.

Expression of Gratitude by the President of the University.

Guests on the day of the ceremony included ŌTANI Kōen 大谷光演, the abbot of Higashi Honganji, along with his wife, Shōko 章子, and prominent dignitaries from the government, such as Duke KONOE Atsumaro 近衛篤磨, Duke KOGA Takemichi 久我建通, Minister of Education KIKUCHI Dairoku 菊地大麓, and Secretary-General OKADA Ryōhei 岡田良平. Also in attendance were the leading ministers of various Buddhist denominations and the heads of several institutions of higher education, including, among others, YAMAGAWA Kenjirō 山川健次郎, President of the Imperial University, INOUE Tetsujirō 井上哲次郎, President of Bunka University, and SHIMAJI Mokurai 島地黙雷. There were over three hundred carriages and rickshaw assembled at the campus on the day of the ceremony.

3) *The Hopes regarding the Establishment of the University in Tokyo*

Why did Kiyozawa want to move Shinshū University from Tokyo to Kyoto? In order to answer this question, we must consider the sense of crisis that Kiyozawa held at that time.

Those who, along with Kiyozawa, sought the innovation of doctrinal studies had argued in favor of the move to Tokyo for several years. In an article entitled “*Shinshū daigaku shinchiku no ichi ni tsuite*” 真宗大学新築の位置について (Regarding the Place of the Reconstruction of Shinshū University), which appeared in Volume Nine of *Kyōkai jigen* 教界時言 (Timely Words for the Religious World), giving reasons such as the insufficiency of space in classrooms at the university and the fact that the university was crowded in the middle of the busy city streets of Kyoto, both of which were an obstruction to classes, Kiyozawa states that the fact that a proposal for reconstruction was going to be considered in the congress of the denomination is to be applauded. Further, regarding the place of reconstruction, he argues that “as an ultimate goal, both Kyoto and Tokyo should be decided upon [as the two locations of Shinshū University], but reconstruction should first take place in Tokyo.” In other words, he was in favor of a plan to establish the university in both Kyoto and Tokyo.

However, needless to say, the small size of the classrooms and other problems with the facilities in Kyoto was not the reason for moving to Tokyo. The majority of the article, *Shinshū daigaku shinchiku no ichi nitsuite*, is focused on the denigration of the Buddhist world, especially the conditions in the Ōtani-ha and the progressive nature of Tokyo.

In that article, Kiyozawa called for the reformation of the Ōtani-ha, but the “point of the reform” was “spiritual reform,” the revitalization of the “religious spirit.” However, in spite of this aspiration, the reality of the times was a state of extreme “putrefaction of the ministry.” The cause of this situation lay in the “dereliction in the education of ministers.” Therefore, what was most necessary was “spiritual education.”

Why Tokyo? Kiyozawa argues that Tokyo is “the center of our culture and the place where the great majority of social changes first appear.” However, the situation of the Buddhist world was the exact opposite. As society was changing and advancing, the Christian community placed Tokyo at the center of its activities and was gaining strength. On the other

hand, Buddhism was not changing at all. Kiyozawa held that the fact that the Buddhist world remained locked up in the “provincial society of Kyoto” was one reason for its diminishing influence. Therefore, for the establishment of Shinshū University, Tokyo was “the most appropriate place to cultivate capable and vivacious men of religion who are brimming with religious spirit, and full of thriving, progressive thought.” Here, we can plainly see Kiyozawa’s expectations regarding the establishment of Shinshū University in Tokyo.